

『量評釈』の章の順序について(2)

木村 誠 司

I

始めに、これまでの経緯をごく簡単に述べておこう。ダルマキールティ Dharmakīrti (600-660) の主著『量評釈』 *Pramāṇavārttika, Tshad ma rnam par 'grel pa* の章の順序をめぐる、古来、次の二説が主張されてきた。

第一説 I 「為自比量」 *svārthānumāna, rang don rjes su dpag pa* 章,
II 「量成就」 *pramāṇasiddhi, tshad ma grub pa* 章, III 「現量」 *pratyakṣa, mngon sum* 章, IV 「為他比量」 *parārthānumāna, gzhan don rjes su dpag pa* 章

第二説 I 「量成就」章, II 「現量」章, III 「為自比量」章, IV 「為他比量」章

チベットの学僧ケドゥッポジェ = ゲレクペルサンポ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385-1438) ・ゲドゥンドプ = ダライラマ一世 dGe 'dun grub Dalai Lama I (1391-1474) ・コラムパ = ソナムセンゲ Go ram pa bSod nams seng ge (1429-1489) はそろって第一説を支持していた。しかし、前二者がデーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi (630-690) 説とシャーキャブッディ Śākyabuddhi (660-720) 説に準拠するのに対し、コラムパはヤマーリ Yamāri 説とラヴィグプタ Ravigupta 説に準拠するという相違があった。前稿では、以上を紹介した止り¹⁾、インドの註釈家達の見解を、彼らの自著を通じて検討することを怠ってしまった。本稿は、その欠を一部補うためのものである。

本論に入る前に、シチェルバッキー Th. Stcherbatsky の業績に言及しておきたい。シチェルバッキーは、プラジニャーカラグプタ Prajñākaragupta ・ジナ Jina ・ラヴィグプタ ・ヤマーリという四人のインドの註釈家達を「宗教学派」(Religious School) の名の下に一括し、<章の順序>に対する彼らの見解にも触

れた²⁾。従来、この報告は真偽不明であったが、以下で明らかになるように、きわめて精確なものであることが判明した。彼の報告は、ゲドゥンドゥップ著『偉大なる量の論書、正理莊嚴』*Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i rgyan* (以下『正理莊嚴』)の記述と一致するものであった。その意味で、報告は正確であると言えよう。しかし、当の『正理莊嚴』の記述にはやや問題が残った。それは必ずしも、インドの註釈家達の見解を忠実に反映したものではないように筆者には思われたからである。とはいえ、筆者は、インドの註釈家の見解を完全に把握できたわけではない。特に、ヤマーリとジナが展開する精緻かつ詳細な見解は、筆者の理解力を遙に越えるものであった。

II

ヤマーリは、自著『量評釈莊嚴註疏・極円浄』*Pramānavārttikālamkāraṭīkā Supariśuddhā, Tshad ma rnam 'grel gyan gyi 'grel bshad Shin tu yongs su dag pa* (以下『極円浄』)において、まず、第二説支持者の見解を否定対象として、次のように提示する。

(A)ある者は次のように言う。[量の] 一般的定義 (spyi'i mtshan nyid) がなければ、ヴェーダ (rig byed, veda) 等は量 (tshad ma, pramāṇa) でないことを³⁾ 理解し得ないので、一般的定義を述べるために、第一章 [たる『量成就』を著したの] である。それから、自利 (rang don, svārtha) が増大する根本となるので「現量」章なのである。為自比量は現量に依存する量なので現量の後なのである。その直後 (de ma thag, anantara) に為他比量なのである。それ故、[章の] 順序⁴⁾ に対して反論が生ずる [余地] はどこにあるか。彼に順じて発言する他の者達は、「デーヴェンドラブッディ lHa dbang blo 等は、章の順序⁵⁾ を曲解 ('khrul) しているのであり、阿闍梨 [ダルマキールティ] が、為自比量を第一に説明したのは、[理解] 困難だからなのである」と補足するのである。(Phe, 179a⁷-179b²)

この見解は、一体、誰が主張したものなのだろうか。ゲドゥンドゥップは『正理莊嚴』においてこれとほぼ一致する見解をジナのものとして次のように提示する。

(B)阿闍梨ジナ rGyal ba can は次のように言う。一般的定義を説かず特殊 (khyad par) な定義を理解できないので、量の一般的定義を述べるために「量成就」章を第一に説き、それから自利が増大する根本となるので「現量」章を説き、為自比量は現量に依存する量なので「現量」章の後に説き、その直後に、為他比量を説いたのであるが、デーヴェンドラブッディが「為自比量」章を第一とした時、[彼は] 章の順序を曲解したのである。しかしながら、阿闍梨 [ダルマキールティ] が為自比量を第一に説明したのは何故かと言うならば、それは理解困難なので、第一に説明したのである。

(8b⁸⁻⁵)

ジナの著作から、部分的に上記(A)・(B)と一致するかのような記述を見出すことは出来る。ジナ著『量評釈莊嚴註疏』*Pramāṇavārttikālamkāraṭīkā, Tshad mar nam 'grel gyi rgyan gyi 'grel bshad pa* (以下『ジナ註』)を見てみよう。

(C)自利を完成する (phul du byung ba) 根本となるので最初に現量なのである。それに随順する比量も量なので、所証 (sgrub bya, sādhya) に遍充 (khyab pa, vyāpti) された証因 (rtags, hetu) を導くことだけによって、言葉たる言説 (tha snyad, vyavahāra) に結びつけるために為自比量の後に為他比量を達成することを望んで説いたものが、「救護者」⁶⁾ (skyob, tāyin) とされるものである。この三つの量にとっても、一般的定義がないならば、ヴェーダ等は量でなく、定義を離れているものであることを理解し得ないので、量の一般的定義を証明するために、第一章〔たる「量成就」章〕によって、それを説いたものが、「量となった方」⁶⁾ (tshad mar gyur pa, pramāṇabhūta) とされるものである。(De, 4a²⁻⁴)

記述(A)・(B)の一部は、記述(C)に基づいたもののように見える。しかし、記述(A)・(B)が、第二説支持者の見解を提示していることは間違いのないとしても、記述(C)はどうなのだろうか。ジナは、記述(C)の直前で次のように言うのである。

彼〔ディグナーガ Dignāga (480-540)〕の著作を説明する手段 (thabs) となって、〔ダルマキールティは〕比量を第一に説明したのではないのである。…中略…その世尊はまた、正しい言説に依存して因 (rgyu, kāraṇa)・果 ('bras bu, kārya) の状態 (gnas skabs) の区別によって二種であり、因の状態とは菩薩の状態であり、その時にも、すべてを比量によって理解せしめるために世尊は比量を最初に説いたのである。(De, 3b⁴⁻⁷)

この記述は少なくとも第一説を否定するものではないであろう。それどころか、第一説支持者としてのジナが独自の見解を披瀝した記述のように思われる。とすれば、これに続く記述(C)が第二説支持を表明するものであるとは考え難いのである。さらに、ジナは『ジナ註』において、明らかに第一説を支持して次のように言う。

量と他方〔非量〕の考察 (rnam par dpyad pa, vicāra) は比量によってな〔される〕ので、それ自身を第一に設定してから、第二〔章「量成就」章 k.1〕で、それだけが無撞着 (mi slu can, avisamvādin) な量であると述べることによって、一般的にも区別し、現量によって陳述し、その後、その二つによって理解したことを他人に述べる。(Ne, 222a⁶⁻⁷)

筆者には、実のところ、記述(C)の内容が理解出来ない⁷⁾。従って、ここで、結論を下すことは差控えざるを得ないのであるが、ジナを第二説支持者とするゲドゥンドゥップの記述(B)およびそれと呼応するように「ジナは第二説支持者である」旨を伝えたシチュエルバックキーの報告⁸⁾に対して疑問を呈しておきたい。

さて、結局、ヤマーリが記述(A)において提示する見解を誰のものとも決定出来なかったが、次にそれに対するヤマーリの批判を見てみよう。奇妙なことにヤマーリは、記述(A)の前半部を批判していない。彼の批判は「彼に順じて発言する他の者達…」以下に向けられている⁹⁾。「デーヴェンドラブッディ等は章の順序を曲解している」という見解に対し、ヤマーリは『極円浄』において、まず、次のように述べる。

内容(brjod bya, abhidheya)を曲解しているだけの阿闍梨デーヴェンドラブッディが直接〔ダルマキールティから教えを〕聞いた者であることはどうなるのか。これによってこれを説明したのであると把握する能力は幼児 (byis pa, bālaka) においてすら、損なわれていないからである。(Phe, 182b¹)

ヤマーリは、このように皮肉を込めながら、デーヴェンドラブッディに言及し、さらに次のように言う。

〔デーヴェンドラブッディが〕内容を曲解しているということは理に適っている (rigs) のである。また、曲解しているのだとしても、ディグナーガ Phyogs kyi glang po に執着 (mngon par zhen) することによって、彼〔ディグナーガ〕だけの評釈として〔『集量論』 *Pramāṇasamuccaya* に『量評釈』を〕結び付けたのであるが、書き終わってから行なわれた章の順序¹⁰⁾を、そのように曲解しているのではないのである。(Phe, 183b¹⁻²)

以上のヤマーリの見解は、強烈なデーヴェンドラブッディ批判を内包しながらも、章の順序に関しては、デーヴェンドラブッディ説つまり第一説を擁護するものであろう¹¹⁾。

次に、ヤマーリは＜ダブルマキールティが「為自比量」章を第一に説明したのは、それが理解困難な章だからである＞という見解を批判する。この見解は、一見、第一説を支持するもののように見える。しかし、これが、あくまでも第二説支持者によって提示されていることを忘れてはならない。この見解は、＜第二説こそ本来のものであり、第一説はダルマキールティの苦肉の策であること＞を暗示するものであろう。ヤマーリは、これを根拠薄弱な見解であると批判する。ヤマーリは言う。

〔理解〕困難だからであると言うならば、そうではないのである。論書において〔理解〕困難な部分は中間と最後に見られるとしても第一に¹²⁾説明されるものに依存することはないのである。〔第一に〕説明されるとしても順序¹³⁾が混乱 ('khrul) することはあり得ないのである。〔現量〕章より比量が〔理解〕困難であるとも見えないのである。(Phe, 181a¹⁻²)

ヤマーリは、

従って、よく知られた通りの章の順だけが、『量評釈』の御著者のものなのであるということ、これが確定されたのである。(Phe, 183b³)

と述べて、彼の批判を一応締括る。

これまで見たヤマーリの見解は、もっぱら第二説支持の根拠の薄弱さを指適するという批判的側面からのものであった。彼は、積極的に第一説支持を表明しているのだろうか。前稿でも紹介した次の見解がそれに相当しよう¹⁴⁾。

説明されるであろう四聖諦 ('phags pa'i bden bzhi, āryacatuḥsatya) については、比量の説示を理解しなければ、容易に理解出来ないので、比量を最初に説明するのが合理的 (rigs) である。(Phe, 191a¹⁻²)

では、ラヴィグプタはどのような見解を提示しているだろうか。これについても、前稿で紹介済みであるが、再度ラヴィグプタ著『量評釈註』*Pramāṇavārttikavṛtti, Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa* から引用しよう¹⁵⁾。

そのように、四聖諦に向うために、比量を設定してから、それを説示するために第二章によって帰敬偈を明瞭に説明なさったのである。(Pe, 293b²⁻⁸)

ゲドゥンドゥップは『正理莊嚴』において、ラヴィグプタ説に、簡単に触れている。ゲドゥンドゥップは言う。

ラヴィグプタ (Nyi ma sbas pa) 説においても、『[量] 評釈』の目的 (don, artha) の部分をデーヴェンドラブッディは曲解しているのだとしても、章の順序を曲解していないのであると御承認されているのである。(10a¹⁻²)

さて、これまで、ジナ・ヤマーリ・ラヴィグプタの見解を辿ってきた。次に彼らが師と仰ぐプラジニャーカラグプタの見解を検討してみよう¹⁶⁾。ゲドゥンドゥップ著『正理莊嚴』では、次のように言及されている。

[プラジニャーカラグプタ著]『[量評釈] 莊嚴』自身の説は何であるかと言うならば、これについてある者は〔次のように言う〕。量成就が第一章である。『[量評釈] 莊嚴』という註釈書において量成就が第一章であると言われているからである。(10a)

また、ケドゥップジェは『正理大海』において、

『[量評釈] 莊嚴』の御著者 [=プラジニャーカラグプタ] の考えは、前者 [第二説] であり、次のように「為自比量の直後に為他比量を述べるのである。為他比量は為自比量を前提とする (sngon du 'gro ba can, pūrvakatva) からである」と『[量評釈] 莊嚴』において説いているのであり…(Tha, 25a⁴⁻⁵)

と述べて、やはりプラジニャーカラグプタを第一説支持者としている。これは、コラムパ著『廣大なる論書量評釈の説明、普賢光明』*rGyas pa'i bstan bcos*

tshad ma rnam 'grel gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i 'od zer においても同様である。コラムパは次のように言う。

『〔量評釈〕 莊嚴』の御著者は、論書を著作した〔時の〕順序と編集 (glegs bam) 時の順序の二つのうち、第一は、経 (mDo) [=『集量論』] の順序通りに著作したのであり、第二は「為自〔比量〕に対して自註 (rang 'grel, svavṛtti) があるので、〔それを〕第一章と設定したのであるが、デーヴェンドラブッディは章の順序だけについてすら曲解していると説明し、本来の順序は著作した〔時〕の順序それだけであると御主張になるのである。(Ka, 8a⁸⁻⁵)

コラムパはこの後、ケードゥップジェと同じく、「為自比量の直後に…」という記述を引用している。確かに、プラジニャーカラグプタの『量評釈莊嚴』 *Pramānavārttikālamkāra, Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan* には、ケードゥップジェとコラムパの引用と一致する記述は存在する¹⁷⁾。だが、はたしてそれは、プラジニャーカラグプタが第二説支持者であることを証明するものなのだろうか。プラジニャーカラグプタに従う三人の註釈家のうち、ヤマーリとラヴィグプタは明らかに第一説支持者であり、ジナにもその可能性があった。そのような状況の中で、安易にプラジニャーカラグプタを第二説支持者と断定することは許されまい。筆者には、『量評釈莊嚴』の先の記述は、章の順序に関するプラジニャーカラグプタの見解を示すものであるとは思えない。プラジニャーカラグプタは「為自比量の直後に…」という記述の後で、次のように述べるのである。

知覚外のもの (parokṣa, lkog tu gyur ba) を自性とする比量の対象 (anumeya, rjes su dpag par bya ba) すべてを他人に明らかにするもの (prakāśaṇa, gsal ba byed pa) が為他比量であると言うならば、それに対して述べる。因の三相 (trirūpa, tshul gsum) 以外に〔他人に比量の対象を〕明らかにするものはない。それ〔因の三相以外のもの〕は、他人によって理解され得ないので明らかにするものではない。(p. 467, ll. 10-12 / The, 123a⁷-123b¹)

これは、＜他人に何事かを教示する場合、すなわち為他比量を行う場合、為自比量の根本たる因の三相が、その前提であること＞を言明するものであろう。「為自比量の直後に…」という記述にも、実は、それ以上の意味はないのではないだろうか。もし、そうだとするならば、「為自比量の直後に…」という記述を根拠として、プラジニャーカラグプタを第二説支持者とすることは全くの見当違いである。それ故、チベットの学僧達の見解も再考を要することになるろう。

ところで、プラジニャーカラグプタ以下四人の見解は、ケードゥップジェ・ゲドゥップ両者によって一括されて提示されている¹⁸⁾。さらに、ケードゥップジェ

とゲドゥンドゥップによれば、<その四人の中には、第一説支持者と第二説支持者の両方がいる>ことになる。これは奇妙なことではないだろうか。議論の主題があくまでも章の順序であるのならば、最終的に誰の説に準拠しようとも、とりあえず第一説支持者と第二説支持者という分類の中で、議論を進めるのが本筋ではないだろうか。第一説支持者と第二説支持者を一括して提示すること自体筆者には不可解である。章の順序を議論するに際し、プラジニャーカラグプタ以下四人を一括することには、何がそうしなければならない事情があるのだろうか。次にそのことを検討してみよう。

III

先に、ヤマーリの見解を検討した中で、彼がデーヴェンドラブッディ説つまり第一説を擁護しながら、一方で強烈にデーヴェンドラブッディを批判していたことを思い出して頂きたい。ヤマーリの批判の要は、デーヴェンドラブッディが『量評釈』の内容を曲解していること、ディグナーガに執着して『量評釈』を註釈したことの二点であったはずである。第二点と似た批判は、『ジナ註』にも見られる。ジナは次のように言う。

阿闍梨〔ディグナーガ〕を誹謗した罪によって錯乱した ('khrul) 人間を救済しようと望む慈悲によって彼〔ディグナーガ〕の著作に関する説明となった『量評釈』を〔ダルマキールティが〕著わしたのであるということそれは不合理である。これに関して証拠 (tshad ma) はないのである。なぜなら、彼〔ディグナーガ〕の著作を私〔ダルマキールティ〕が説明したという言葉はないからである。(De, 2a⁴⁻⁵)

また、ラヴィグプタは彼の『量評釈註』において、デーヴェンドラブッディの名を挙げて、次のように批判する。

論理学 (rtog ge, tarka) の光明〔かつ〕精髓の意味たる『量評釈』をデーヴェンドラブッディは暗闇とした。(Phe, 174a⁶⁻⁷)

このような批判を受けてか、ケードゥップジェは『正理大海』において次のように反論する。

莊嚴の学者が、…この論書〔『量評釈』〕自身を『集量論』 *Tshad ma kun las btus* の評釈であると御承認にならない理由を私はいささかも見ない…(Tha, 25b⁸)

ここで、ひとつの推理を試みてみよう。プラジニャーカラグプタ達四人は、『集量論』と『量評釈』を別な立場に立つ著作であるとし、両著を強固に結び付けた積任をデーヴェンドラブッディに帰した¹⁹⁾。しかし、ケードゥップジェとゲドゥン

ドップにとって、『集量論』と『量評釈』を別な立場に立つ著作とすることは許し難い暴挙に写ったのではないだろうか。しかも、ジナとヤマーリは、そのような見解を章の順序を議論する際に提示するのである。とすれば、たとえ、彼らが第一説支持者として紹介されていたとしても、ケードゥップジェとゲドゥンドゥップが、その説に準拠することはあり得ないのである。プラジニャーカラグプタ達四人を、否定対象として一括してしまおう方がケードゥップジェ等にとっては、むしろ好都合だったのではないだろうか。以上は、きわめてラフな推理であるが、現時点での筆者の見解である。

さて、確かに『量評釈』は『集量論』の註釈ではないとなどという趣旨の見解は荒唐無稽なものに違いない。だが、あえてそのようなことを述べる理由は何なのだろうか。確たる文献的裏付けもないまま軽率に発言することは慎まねばならないが、きわめて重要な意味があると思われるので、筆者の感想を述べておきたい。ヤマーリやジナ等は『集量論』と『量評釈』との間に根本的相違を見出したのではないだろうか。というのも、筆者自身『集量論』と『量評釈』の間には根本的相違がある、という感想を常々抱いていたからである。ディグナーガは『集量論』の末尾において

量と所量を述べることによって、外道の主張は精髓がないので、それに執着する者達を、退けるためにこれ〔『集量論』〕を著作したのであるが、これだけによって如来の教えに入るためではない。なぜなら、彼〔如来〕の法は論理学の境 (yul) ではないからである。(Ce, 176b⁶–177a¹)

と述べ、最終的には、論理学を不用なものとしている。一方、ダルマキールティは、『量評釈』「為自比量」章 k. 217 および自註において、「人間にとっての主要な目的 (pradhānārtha) は、四聖諦であり、その四聖諦は比量の対象であること」を宣言した²⁰⁾。これは、先のディグナーガの見解と真向から対立するものであろう。従って、＜論理学の位置付けに関して『集量論』と『量評釈』は根本的に相違している＞、というのが筆者のいつわらざる感想である²¹⁾。筆者には、この感想をこれ以上論ずる用意はない。ここでは問題提起だけに止め、すべては今後の課題としたい。

最後に、ダルマキールティ自身の見解を検討してみよう。ニョーリ R. Gnoli とマルヴァニアは、＜「為自比量」章において他章が未来形で示されていること＞を指適した²²⁾。この指適は、ダルマキールティが第一説支持者であることを証明

する決定的根拠であろう。では、なぜ、ダルマキールティは、一見イレギュラーな第一説を採用したのだろうか。その理由も、すでにマルヴァニアによって述べられている通りであろう。すなわち、<『量評釈』における最重要課題は、「量成就」章で扱われる四聖評であり、その四聖諦は、比量を前提としなければ理解できないから²³⁾なのでであろう。本稿は報告の域を出ない。完璧を期して再度論じてみたい。

〈註〉

- 1) 拙稿『量評釈』の章の順序について(1) 駒沢大学仏教学部論集第19号 S. 63 10月 p.462—471
- 2) Th. Stcherbatsky *Buddhist Logic* Vol.1 Dover. Pub. Inc., pp.42-45
- 3) テキストは *rig byed la sogs pa tshad ma ma yin pa las* となっているが、*las* を省いて訳した。
- 4) テキスト *go rims* を *go rim* と改める。
- 5) テキスト *go rims* を *go rim* と改める。
- 6) ディグナーガ著『集量論』の帰敬偈「量となった方、世間を利することをお望みになる方 (*jagad-dhitaiṣin, 'gro ba phan par bzhed*), 大師 (*sāstrin ston pa*), 善逝 (*sugata, bde gshegs*), 救護者に帰命して、「彼を」量であると証明するために、自らの典籍を集成して、断片をここで一つとしたのである。」からの引用であろう。 Cf. M. Hattori *Dignāga, On Perception* HOS. 47, 1968, p. 23
- 7) この記述は「量成就」章の内容概観なのかもしれない。『集量論』の帰敬偈に対する註釈が「量成就」章である。この記述は帰敬偈を引用しながら同章の内容を説明しているのではないだろうか〔注6) 参照〕。ここで、「量成就」章を第一章としていることはジナが第一説支持者であることを明示するかのようである。しかし『ジナ註』は『量評釈』に対する註であると共に『量評釈莊嚴』に対する註である。『量評釈莊嚴』はⅠ「量成就」章、Ⅱ「現量」章、Ⅲ「為他比量」章という構成である。〔『デルゲ版チベット大蔵経』vol.5 の目次参照〕ここでの第一章とは『量評釈莊嚴』の第一章のことであるとは考えられないだろうか。
- 8) Th. Stcherbatsky, op. cit., p. 45
- 9) 『正理莊嚴』によれば、ヤマーリはジナを批判したことになっている。ゲドゥンドゥブは記述(B)のようにジナ説に言乃した後、ヤマーリ説を次のような書出しで紹介している。「それ〔ジナ説〕に対して、阿闍梨ヤマーリ *Ya ma ri* は次のように言う。それは不適切である。…」(8b⁵) ゲドゥンドゥブの紹介するヤマーリ説にも、記述(A)・(B)の前半部に対するような批判は見られない。また、シチェルバッキーは「ヤマーリの著作はジナがプラジニャーカラグプタの著作を誤解したことを叱責する反ジナの激しい論争に満ちている」と述べている。Th. Stcherbatsky op. cit., p. 45
- 10) テキサスの *go rims* を *go rim* に改める。
- 11) 『正理莊嚴』のヤマーリ説を紹介する部分には「デーヴェンドラヴディは論書の深甚な内容を曲解しているのだとしても、順序を曲解しているのではないのである」

- (9a⁶-9b¹) とある。Cf. Th. Stcherbatsky op. cit., p. 45
- 12) テキストは *dang po dang por* となっているが、最初の *dang po* を省く。
- 13) テキスト *go rims* を *go rim* と改める。
- 14) 前掲註 1) の拙稿 p. 465, なお, ケドゥップジェ著『広大なる論書量評釈の広説, 正理大海』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho* (以下『正理大海』) ではヤマーリを第二説支持者としている。ケドゥップジェは次のようにヤマーリ説を紹介している。
- 阿闍梨莊嚴の学者 (*rgyan mkhan po*) [プラジニャーカラグプタ] に従うヤマーリは次のように言う。第一に、確定されるべき主要なものたる「量成就」章を説き、それ自身〔「量成就」章〕によって、量の一般的定義と解脱と一切智者と〔それに致る〕手段 (*thar pa dang thams cad mkhyen pa thabs dang bcas pa*) だけが説かれるのであるが、その定義を具えているその量の分類はどこにあるかと言うならば、「現量と比量が量である」と説いたように、現量と比量の二つと数を確定したのであると証明してから、現量を詳細に確定する「現量」章自身をそれ〔「量成就」章〕の後に説き、しかしながら、その比量はまたどのようなものかということに対して「比量は二種である。為自〔比量〕は、三相 (*tshul gsum*) の理解を通じて対象を見るものであり、為他比量は、自分が見た対象を〔他人に〕明らかにするものである」と説いたことに一致して、その比量をまた、自分が所証を理解する手段たる為自比量をして、その同じものを、他人に理解させる手段たる為他比量の二つに分類し、「為自比量」章自身をそれ〔「現量」章〕の後に説き「為他比量」章を最後に説いたのである。(Tha, 24a⁸-24b¹)
- 15) 前掲註 1) の拙稿 p. 465, シチェルバッキーの報告によれば、ラヴィグプタは次のように述べたとされる。〔「デーヴェンドラブッデは、賢い人間ではなかったが、師の主著における章の順序を曲解するほど愚かではなかった」Th. Stcherbatsky op. cit., p. 44. ケドゥップジェは『正理大海』において、ラヴィグプタ説を以下のように紹介している。
- ラヴィグプタは次のように言う。この論書自身は、聖言一般の評釈であるが、『集量論』だけの評釈ではない、しかし、章の順序をデーヴェンドラブッディは曲解していないのである。(Tha, 25a²⁻³)
- 16) シチェルバッキーは、章の順序に関するプラジニャーカラグプタ説には言及していない。
- 17) Skt. テキスト, p. 467, l. 4, Tib 訳 The, 123a⁵ にトレースできる。
- 18) ケドゥップジェ著『正理大海』では、ヤマーリ説 (Tha, 14a⁸-15a²)・ラヴィグプタ説 (Tha 15a²⁻⁴)・プラジニャーカラグプタ説 (Tha, 15a⁴-15b⁵) の順で一括されている。ゲドゥンドゥップ著『正理莊嚴』では、ジナ説 (8b⁸⁻⁵)・ヤマーリ説 (8b⁵-10a¹)・ラヴィグプタ説 (10a¹⁻²)・プラジニャーカラグプタ説 (10a²⁻³) の順で、一括されている。
- 19) Cf. Th. Stcherbatsky op. cit., pp. 43-44
- 20) この個所の和訳については、若原雄昭「アーガマの価値と全知者の存在証明—仏教論理学派に於る系譜—」*仏教学研究* 第41号 S. 60, pp. 60-61 参照。
- 21) 筆者はかつて「チベット仏教における論理学の位置付け」山口瑞鳳監修 *チベットの仏教と社会* S. 61 春秋社 pp. 365-401 という論文において、「論理学を世俗の学問とみなし、解脱を獲得するための理論と実践を説く仏教学とは認めない立場」を

「論理学非仏教学説」, 「論理学を仏教学と認める立場」を「論理学仏教学説」と仮りに命名した。この仮名を借りれば, <ディグナーガは『集量論』において「論理学非仏教学説」の立場を取り, ダルマキールティは『量評釈』において「論理学仏教学説」の立場を取った>と言えるのではないだろうか。プトゥン=リンチェンドゥブ Bu ston Rin chen 'grub (1290-1364) は, 自著『仏教史』 *Chos 'byung* において, 本論で紹介した『集量論』の記述を「論理学非仏教学説」の教証とした。(拙稿「チベット仏教における論理学の位置付け」 p. 374) プトゥンは, この記述をもって, ディグナーガのみならずダルマキールティをも「論理学非仏教学説」論者と断じているようである。その点について, 筆者はプトゥンに賛成しかねるが, 『集量論』の先の記述を「論理学非仏教学説」とするプトゥンの見解は妥当なものに思われる。また, ディグナーガ=「論理学非仏教学説」論者・ダルマキールティ=「論理学仏教学説」論者という視点を導入した場合, フ라우ヴァルナー E. Frauwallner の著名な論文 *Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrtis, Kleine Schriften pp. 677-689* にも問題が生ずることになるのではないか。フラウヴァルナーが, 『量評釈』第一章の記述は不備であり, 『集量論』に対する評釈を含むべきであったことを「ダルマキールティは」断念しなかった'(p. 148, ll. 1-3) あるいは「どうしてダルマキールティはそのような表面的な結合で十分としたのか。なぜ, 旧著を修正せず, 後に『量決択』で行った如くに『量評釈』の他章に合致させなかったのか。この問いには答えられる。私の信ずる理由は, 『量評釈』が決して完成されなかったこと, その点に求められるべきなのである'(p. 148, ll. 36-40) 等と述べる時, フ라우ヴァルナーの頭には<ディグナーガの『集量論』の立場をダルマキールティは『量評釈』において忠実に継承しようとした>という想いが前提としてあるように思われる。しかし, もし, 両著の立場が根本的に相違しているとするならば, 以下のように言うことも可能なのではないだろうか。<ダルマキールティは反ディグナーガの立場を『量評釈』で示したのであり, その意味で『量評釈』は完成された著作である>と。

22) R. Gnoli, *The Pramāṇavārttika of Dharmakīrti*, SOR XXIII, pp. XV-XVI note 1, D. Malvania, *Svārthānumāna-pariccheda*, Hindu Vishvavidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series Vol. II, p. 5

23) D. Malvania op. cit., p. 5, 註1) の拙稿 p. 99 註5) 参照。

(S. 64, 1/5 脱稿)

《使用テキスト》

Pramāṇasamuccaya of Dignāga, Peking ed. No. 5702

Pramāṇavārttika of Dharmakīrti, ed. by R. Gnoli SOR XXIII

Pramāṇavārttikabhāṣya of Prajñākaragupta, ed. by R. Sāṅkrṭyāyana, TSWS 1

Pramāṇavārttikālamkāra of Prajñākaragupta, sDe dGe ed. No. 4221

Pramāṇavārttikālamkāraṭīkā supārisuddhā of Yamāri, sDe dGe ed. No. 4226

Pramāṇavārttikālamkāraṭīkā of Jina, sDe dGe ed. No. 4222

Pramāṇavārttikavṛtti of Ravigupta, sDe dGe ed. No. 4225

Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i gyan of dGe 'dun grub, The Collected Works. Vol. 5, Gangtok 1981

rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsha of mKhas grub rje, Tohoku No.5505

rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i 'od zer of Go ram pa, Sa skya pa'i bka' 'bum, vol.11, Toyo Bunko 1969

<付記>ダルマキールティの見解に関して。筆者は、マルヴァニア説を支持したが、完全に同意しているのではない。もし、『量評釈』が『集量論』に対する註釈という形を取りながら、実は、『集量論』批判をも意図した著作であるとするならば、イレギュラーな「章の順序」は、その意図を反映した周到な計算に基づいて採用されたものかもしれないのである。マルヴァニア説には、そのような視点が欠けている。以上のことは、『集量論』と『量評釈』との綿密な比較検討の後に明らかにすべきことである。残念ながら本稿では、そこまで到らなかった。(1989, 3/20)